Ⅳ　まとめと今後の課題

本校では、多様化、重度化する対象となる精薄児の教育を、０才児からの経験獲得の過程の中で模索し、将来の社会自立に向って、最も効果的な指導の手がかりを求め、研究を続けてきた。

その中で一貫してとってきた態度は、研究のための研究を戒め、新奇を追うことなく、精神薄弱教育の原点に立って、この教育を見直そうということであった。指導法の構想の最初に、その基本原則にふれたのも、本校の取り組み姿勢を確認する意味もあったのである。

従って、本校のめざす表現化に視点をあてた教育は、至極あたりまえの考え方で、あたりまえの教育実践の中から、子どもたちの社会自立を目ざしていると言うことができる。しかし、現実には、このあたりまえと言うことが、大へん難かしいことであって、主題との取り組みの中で種々問題点が指摘され、その解決に努力してきたのである。しかし、今後に残されている問題は、更に山積されており、来年度は、授業実践をつみ重ねるなかから、問題解決の糸口をたぐっていくことを確認している。主なものを挙げると、次の通りである。

1. 段階別教育内容が、社会自立を目ざす立場から更に検討し、「より必要なもの」から「確実に必要なもの」へ内容精選が必要ではないか。
2. 発達段階をふまえ、経験の拡大をはかる指導では、知識技能面にウェイトがかかっている。学習過程で考えている、心豊かな心情や意欲的で行動的な態度の育成とどう取り組んでいくかを工夫しなければならない。
3. 表現化に視点をあてた構想が、如何に将来の社会自立を確実に指向していても、最終的には一人ひとりの教師の持ち味を生かした実践によってのみ裏づけられていなければ何の役にも立たない。表現化に視点をあてた授業研究を更に深めていかねばならない。
4. 研究の中で、評価の面からの追究が欠けている。授業の構成、指導法、子どもの反応、諸能力や態度の定着などを適確に把握しなければならない。しかし、研究のための研究が何の意味もないと同じように、評価をやたら行って、授業のさまたげになるようでは困る。正しい評価についての追究も来年度へ更に深めていきたい。
5. 本年度の研究との取り組みを通して、表現化に視点をあてた構想段階での共通理解が、実践段階に生かされないところがまだまだ多い。ひとつは、精神薄弱教育がまだ普通教育の枠の中でしか考えられない教師集団の認識。精神薄弱児の実態がわかっているようで、かわっていないという根本的な問題がある。子どもと保護者と教師が一体となって、子どもの理解から一歩一歩研究の歩みをつみ重ねなければならないことを痛感している。